

りんご輸出の現状と可能性

(28年1月1日青森県りんご協会りんごニュース原稿)

一般社団法人青森県りんご輸出協会
事務局長 深澤 守

1 はじめに～輸出3万tの新記録達成

新年明けましておめでとうございます。本年もりんご関係者にとって良い年であることを祈念しています。

さて、青森りんごは明治8年に植栽が始まり、昨年140周年を迎えましたが、輸出も明治32年に始まり、この間116年もの長い取組があった。そして、日本全体の記録ではあるが、平成26年産で初めて3万tの大台となる3万115トンを輸出し、輸出金額109億9千663万円とそれぞれ新記録を達成した。

表1 日本りんごの輸出量(財務省貿易統計)

国・地域	18年産	19年産	20年産	21年産	22年産	23年産	24年産	25年産	26年産	前年比
台湾	22,318	23,878	20,498	21,656	15,912	8,459	13,214	16,561	23,417	141
香港	420	591	857	1,284	1,134	875	1,192	2,596	5,416	208
中国	197	405	274	263	405	155	100	280	672	240
タイ	211	268	301	331	309	233	257	248	301	121
シンガポール	56	77	72	101	48	33	34	69	151	219
インドネシア	59	77	67	85	62	57	44	61	27	44
マレーシア	—	15	7	14	9	6	11	18	48	272
フィリピン	9	9	8	14	21	14	13	13	27	207
ベトナム	—	—	—	24	3	—	—	8	—	—
その他	128	177	171	95	36	33	34	33	52	171
合計	23,398	25,497	22,256	23,867	17,940	9,867	14,898	19,886	30,115	151

注) 年産は9月から翌年8月

表1に近年のわが国の輸出状況をまとめている。18年産から21年産では4年連続で2万トンを上回る輸出を行っており、19年産で2万5千トンとそれまでの最高を記録している。平成14年に台湾がWTOに加盟して日本産りんごの輸入枠が撤廃され、自由貿易品目になったことによる輸入拡大が進んだ結果である。

22年産から減少に転じるが、主な要因は円高である。台湾ドルと円の為替相場の推移を見ていくと平成17年頃から円高が始まり、平成23年がピークになっている。約3割も高騰したため、円建てで貿易を行っている台湾の業者にとっては、日本産りんごを扱っても利益がでないという状況に。丁度東日本大震災が発生したのが平成23年の3月11日で、台湾向け輸出が落ち込んできた時期と重なることから、原発事故を減少の要因と捕らえる向きもあったが、減少傾向は震災前からはっきりと現れていたため、その影響は限定的なものと考えている。

逆に為替相場が円安に転じたのが平成24年からで、25年には18年以前の水準

に戻っており、一転為替だけでも儲けが出るという状況で、25年から好調な輸出につながっている。特に26年産に関しては台湾青森りんご友の会の情報交換会で台湾側の代表から、26年産は円安や旧正月が遅いなど青森産の輸出を増加させるチャンスと予測されていた。まさにこの指摘どおりに順調に輸出が進んだ。

2 香港に注目～黄色（緑色）りんご躍進

最近の注目は香港市場だ。平成21年産で久々に1千トン台を回復し、25から26年産と倍々で増加し、26年産は5千416トンとなった。昭和40年代まではコンスタントに4ケタ台の輸出を続けていて、台湾向けが主力になる以前は、香港を経由してアジア各国に輸出してきた。

香港は人口700万人だが、観光客など通過人口は5千400万人を超え、このうち4千万人が中国本土からの通過人口という大きなマーケットである。香港でりんごは生産されていないので、一年を通じて世界各地からりんごが輸入されている。

りんごの輸入量は13万トン前後で、台湾よりやや少ない。輸入先は中国がトップで約48%、次いでアメリカ28%、ニュージーランド9%、チリ6%、日本3%、フランス3%の順である。

香港は植物検疫がなく、関税もかからない。台湾向けのような選果場登録などの検疫措置が不要なため、国内の消費地市場からりんごを調達して輸出することも可能となっている。統計がないので定かではないが、8割方がこうした取引だとの見方がある。

香港に輸出されたりんごは、半分以上が大陸に再輸出されると言われてきた。しかし、最近の再輸出量は29%(2014年)となっている。香港市場の消費構造が変化しているらしい。香港のスーパーマーケットに本土の中国人が爆買いに来ているとの情報もある。

香港で人気があるのは王林だ。王林は一年を通して販売されており、しかも緑の王林に人気があるとのこと。ほかトキ、金星など黄色系のりんごが主流で、赤いりんごは世界各地から入ってくるから、日本の赤いりんごには需要が少ないとか。いずれにしても、香港市場の将来性には大いに期待が持たれるが、消費や流通、中国本土への再輸出など解らないことが多い。今後、県等と連携して実態調査が予定されているので、機会があったら追って情報提供したいと思う。

3 TPPの影響

2015年10月5日TPP交渉が大筋合意となった。それまで交渉内容がほとんど明らかにされていなかった中で、いきなりわが国のりんごの関税が11年目に撤廃されることが解って驚かれた向きも多かったのではないかと。詳細は不明な点が多いが、現時点でわが国のりんごは次のようになる。

・交渉結果

品目／現在の関税	合意内容
りんご(生果) 17%	初年度に25%削減し12.7%に、その後段階的に11年目に撤廃年1.3%づつ削減

・今後の手続き（参加各国）

条約文の確定（最終合意）→署名→国内手続き(国会承認)→寄託国（ニュージーランド）
通知→T P P発効（最短で2年2ヶ月後）

T P Pによる本県りんごへの影響であるが、輸入と輸出の両面からの検討が必要だ。まず、輸入への影響だが、日本がりんごを輸入したことがあるのは、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、韓国、北朝鮮、ネパール、フランスの7カ国で、現在も続いているのはニュージーランドのみである。アメリカ、オーストラリアが日本向けから撤退したのは、関税が高いからではなく、日本の検疫措置で決められているくん蒸処理によってりんごの品質が維持できなかつたことが最大の原因である。ニュージーランドも同様の理由で一時撤退しており、現状の検疫措置が維持されている間は、多くの輸入が行われる懸念は少ない。しかし、流通業者の一部にはT P Pを契機にりんご輸入を模索する動きもあるようだ。情報収集が欠かせない。

一方輸出に関しては、最大の輸出相手である台湾は今回のT P Pに参加していない。台湾とニュージーランド間で自由貿易協定が締結されて、N Z産のりんごの関税が平成25年12月に撤廃されている。その効果から台湾市場でN Z産のシェアが伸びている。台湾では平成28年1月に総統選挙が予定されているが、野党候補は台湾のT P P参加を表明している。もしこれが実現すれば、日本産りんごも現行20%関税撤廃で、より競争力強化につながるものと思われる。今回T P Pに参加している国で、日本のりんごが輸出されているのは、マレーシア、シンガポール、ベトナムで、既に2国間協定で関税が撤廃か削減方向にある。これらの国では安価な中国産との産地間競争を勝ち抜く必要があり、関税撤廃だけで輸出が拡大するとは思えない。

いずれにしても、りんご生産も国際環境の影響を受けることを十分に念頭においておく必要があると思う。

4 輸出の可能性

27年10月に開催した、台湾青森りんご友の会情報交換会には、総勢13名が参加し、うち9名が台湾各地でりんごの仲卸業を営んでいる女性で、今回はより消費者の視点に近い話が聞けたと感じた。以下情報交換の一端を紹介する。

台湾人が輸入りんごに期待するポイントは何かという日本側の問に1番目に赤いかどうか、より赤いものに人気がある。2点目は甘いかどうか。そして3点目は硬いかどうかを確かめるといふ。

日本のりんごのポジションはとの問には、1位チリ、2位アメリカ、3位日本、4位ニュージーランドでN Zは関税が撤廃されたので、まだまだ伸びるといふ。

台湾のりんご消費はとの質問には、台湾人は年齢に関係なく若い人から年寄りまで万遍なくりんごを食べるといふ。日本のように高齢者中心の消費構造とは異なるようだ。りんごと競合する果物はキウイフルーツとの回答で、その理由は健康効果を強調したコマーシャルが上手だとした。

このように、赤くて、甘くて、硬く、健康に良いりんごの評価は極めて高い。りんごが台湾の輸入果物ナンバーワンの地位を確保している所以である。

28年産の輸出が始まっている。この原稿を執筆している時点で、11月第3週までの輸出速報が公表されているが、それによると3万tの輸出実績があった、27年産を

上回る勢いで輸出が進んでいる。これまでの輸出量は 9,476 トンで前年比 142%である。特に 9 月が前年の 2.6 倍になっているが、これは、台湾が 9 月に 2 度の台風直撃で国産果実が大きな被害を受けたため、輸入果実の需要が高まったという背景があった。丁度本県のトキの出荷時期と重なって、輸出特需となって産地価格を上昇させた。その後 10 月でやや落ち着いたものの 11 月では再び増加に転じている。この間産地市場の高騰で仕入れ価格・輸出単価とも上昇して輸出が低迷するのではとの懸念もあるが、これまでのところ順調に推移している。競合するアメリカ産も単価上昇が伝えられているので、救われている面もあるのかもしれない。

台湾市場で 2 万 3 千 t、香港市場で 5 千トンの実績が青森産の底堅い需要を形成していると感じられる。今後とも輸出戦略を手堅く継続していけば、台湾市場 3 万 t、香港市場 1 万トン、その他市場 1 万トン、合計 5 万トンの輸出も十分可能であると確信しており、本県りんご産業に輸出が大いに貢献し続けることだろう。